

## 特集：卒業

## 生物学類学生表彰を受賞して

市川雄太（筑波大学 生物学類 4年）

「先生あのね、今日、僕が飼っていたヤゴが死んでしまったよ。いつかヤゴをトンボにしてあげられる人になりたいよ。」

これは自分が小学生のころに学校の宿題で書いた「あのね帳」という日記から抜粋した文章です。大学4年生の夏、実家の愛知県に帰省した際、この日記をたまたま見つけ、一人で笑ってしまいました。もしタイムマシンがあるならば、小学生の自分に、

「2メートルの虫網を使い、野外で雌のトンボを捕まえ、腹部の末端を瓶に入れた水にリズムカルに打ちつけて採卵し（強制産卵法）、その卵を実験室内に持ち帰り、15℃～35℃まで5段階に設定した恒温器内で飼育し、孵化した幼虫にイトミミズを毎日適量与え、羽化が近づいたヤゴは専用の羽化ゲージに移動させることで、『ヤゴをトンボにしてあげられる人』になったよ。」と教えてあげたいです。

昔から、昆虫採集をしたり、生物を飼育するのが好きでした。しかし、生物について詳しくなかったと言われるれば、決してそんなことはありません。

高校で理科の選択科目を選ぶ際も、「物理よりは生物の方が好きかな」という消極的な理由で「生物」を選択しました。筑波大学を受験することに決めたのも、将来の夢である教師になりやすい環境だと感じたからです。

「生物学類」に入学し、初めて同期と集まった「顔見せ」において、「名前、あだ名、出身、趣味、好きな生物を紹介してください」と当たり前のように言われた時、自分はすごい世界に足を踏み入れてしまったなと感じました。好きな生物として、あまりにもありきたりな生物を挙げてしまうと、なんだか恥をかいてしまいそうな雰囲気があり、「ツチガエルが好きです」と言ったのを今でも覚えています。精一杯の背伸びでした。

そんな不安なスタートを切った大学生活でしたが、一年次の概論、基礎生物学実験、そして、二年次からの専門科目の授業を受け、次第に生物学の魅力に心奪われるようになりました。生物学類の先生方は、学生以上に生物を愛している人が多く、生物に対する愛情が授業を通してひしひしと伝わってきました。

生物学類で用意されている多様な授業を一通り受けることで、自分はフィールドで調査している時、一番生き生きとしていることに気がつきました。とりわけ、トンボの調査をした「陸域生態学実習」が印象に残っていたので、「保全生態学研究室」の門を叩き、渡りを行なうウスバキトンボの研究を始めました。

トンボの卵が夢にでてうなされるほど卒業研究は大変でしたが、すごく充実した一年間でした。保全生態学研究室では、四年次から、または、それ以前から学会発表に挑戦することができません。研究としてはまだまだ未熟ですが、学会という場で発表し、意見をもらうことで、自分の研究の位置づけや価値を改めて実感することができました。

大学院へ進学せずに教師になるという選択肢もありましたが、保全生態学研究室で一年間過ごし、あと二年間研究したいという気持ちが強くなりました。大学院入学後も、日本の各地や海外に足を運び、自分の目で見て、聞いて、感じて。教師になった時、生徒達に話せる体験談を一つでも増やしたいと考えています。

四年間の努力を生物学類学生表彰という形で評価して頂けたことを非常に嬉しく思います。お世話になった渡辺守先生、横井智之先生、藤浪理恵子先生、廣田充先生、生物学類の先生方、保全生態学研究室の皆様、サークルの仲間、バイトの店長、バイトの仲間、学類の友人ら、そして、大学に入学させてくれた家族に感謝したいです。



広島で開催された、第61回生態学会に参加した際、宮島で作ったオリジナルキーホルダーです。